

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研ことばの波止場：国立国語研究所研究情報誌
vol.7 (2020.3)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所研究情報誌編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002818

ことばの波止場

NINJAL Research Digest

vol. 7
2020. 3



特集

国立国語研究所創立70周年
人間文化研究機構移管10周年記念事業



研究者紹介
刊行物紹介・著書(近刊)紹介

記念シンポジウム

「国立国語研究所の果たすべき役割」



2019年10月1日(国立国語研究所講堂)

創立70周年・ 移管10周年記念

国立国語研究所（国語研）は1948年12月20日に創立され、2018年に創立70周年を迎えました。また、2009年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管となり、2019年には移管10周年を迎えました。

2018年から2019年にかけて、創立70周年、移管10周年を記念して、様々な催しを実施しました。国語研で現在行われている活動を紹介するために、2018年12月15、16日にはNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」を行いました。これまで年に一度開催しているNINJALフォーラムも、ここ2年間は周年記念行事と位置づけて実施しました。2018年11月4日に第13回「日本語の変化を探る」を、2019年11月30日に第14回「私の日本語の学び方」を実施しました。

また、2018年12月22日に「オープンハウス2018」（『波止場』5号にて報告）を、2019年7月20日に「オープンハウス2019」を行い、国語研の現在の姿とともに国語研の成

果を所員によって紹介し、大勢の方にお越しいただきました。

そして、2019年10月1日には、70周年・10周年記念のシンポジウム、式典、祝賀会を開催しました。

記念シンポジウム「国立国語研究所の果たすべき役割」

【将来計画委員会への諮問に対する中間報告】

小木曾智信(国語研教授／将来計画委員会委員長)

【パネリスト】

ジョン・ホイトマン(コーネル大学言語学科長)

ロバート・キャンベル(国文学研究資料館長)

田中ゆかり(日本大学文理学部教授)

田中牧郎(明治大学国際日本学部教授)

新井紀子(国立情報学研究所社会共有知研究センター長)

田窪行則(国語研所長)

【司会】

前川喜久雄(国語研教授)

将来計画委員会への諮問に対する中間報告

記念シンポジウムでは冒頭で将来計画委員会委員長の小木曾教授より、中間報告が述べられました。将来計画委員会は、次期中期計画（第4期：2022年度～）を主な焦点とする将来



田窪行則所長による開会あいさつ



将来計画委員会の中間報告を行う小木曾智信教授(同委員会委員長)

計画を議論するために2018年度に国語研内で発足しました。若手・中堅の研究教育職員からなる委員7名に加え、次期中期計画期間を通して在籍する可能性のある研究教育職員全員をオブザーバーとして構成されています。ほぼ月1回、委員会が開催され、議論が行われています。

これまでの委員会での議論の中から、次期中期計画における共同研究プロジェクトと若手研究者育成に関して現時点での状況をまとめたものが中間報告として報告されました。

報告は、「最初に申し上げたいのは“オープンサイエンス・オープンデータ”です。」との言葉から始まりました。全てのプロジェクトをオープンサイエンスの考え方を基盤として運営し、プロジェクトで作成するデータはオープンなデータとして公開することを基本とする、との方針が示されました。

重点を置くプロジェクトを中心に、取り組むべき研究課題を分野ごとに整理したものとして、図1が示されました。図の中心にある「コーパス・アーカイブ」(第3期で構築された言語資源)を核としてこれを拡張しつつ、「言語資源の活用」「教育・発達」「理論・実験」「フィールド・社会調査」の4つの研究分野において研究活動を展開することがイメージされています。図の円で示した各分野に重点プロジェクトが設置されるとともに、円の重なりで示された融合研究として、中小規模のプロジェクトが実施されます。そして、全体がオープンサイエンス・オープンデータに覆われ、これが全ての研究プロジェクトの基盤となる研究のあり方であることが示されています。

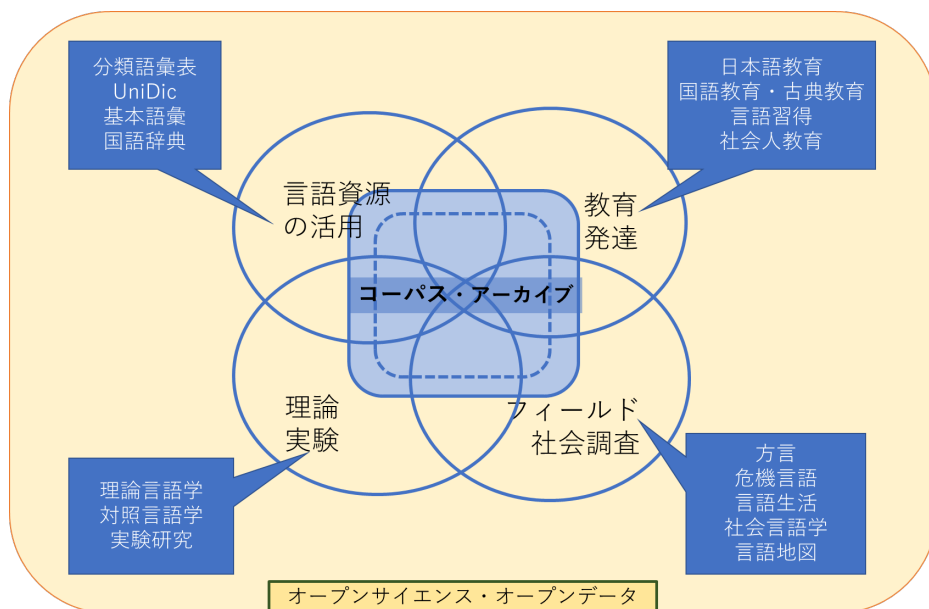


図1 取り組むべき研究課題と融合研究のイメージ図



ジョン・ホイットマン氏



田中ゆかり氏



ロバート・キャンベル氏



田中牧郎氏

パネリストによる講演

小木曾教授からの中間報告を受けて、ジョン・ホイットマン氏(コーネル大学言語学科長/国語研名誉教授【上代の日本語】)、ロバート・キャンベル氏(国文学研究資料館長【文学】)、田中ゆかり氏(日本大学 文理学部教授【社会言語学】)、田中牧郎氏(明治大学国際日本学部教授/元国語研教授【日本語史・語彙】)、新

井紀子氏(国立情報学研究所社会共有知研究センター長【AI】)より、それぞれご専門の見地から、ご意見をいただきました。

これまでの70年間

パネリストの一人、田中牧郎氏は、国語研に過去18年間に在籍していました。その立場からこれまでの



新井紀子氏

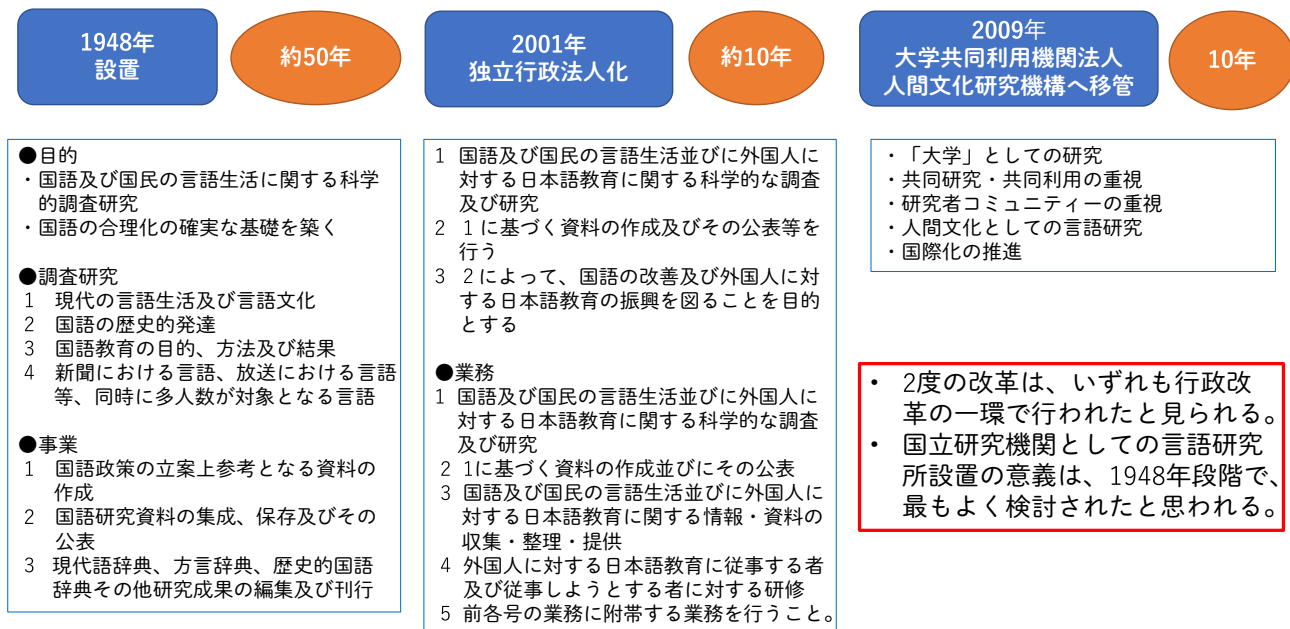


図2 国立国語研究所のこれまでの70年間

70年を振り返り図示してくださったのが、図2の「国立国語研究所のこれまでの70年間」です。はじめの50年間は国立の機関であり、次に独立行政法人として約10年、そのあと、大学共同利用機関法人人間文化研究機構として10年が過ぎたところであるとの説明で、国語研の経緯が示されました。

「国語研究所の果たすべき役割」の考察

そもそもなぜ日本という国に言語研究所が必要なのかというあたりから

整理した、との説明のあと、図3の「[1948年設置法]の点検」が示されました。緑字は、これまでに高度に達成されている部分であり、評価されるべき点であるとのこと。しかしながら、赤字は現在の国語研に欠けており、このあたりから必要性の高いものを検討していくべきではないかとの提言がありました。

パネルディスカッション

講演に続いて、パネリストに田窪所長も加わり、前川教授の司会で、

国語研の果たすべき役割について活発な議論が行われました。

外国人労働者増加と日本語

外国人労働者の増加に関わる日本語の問題から議論が始まりました。

ここには、日本語を母語としない児童生徒と労働者の日本語習得という2つの問題があるとの指摘がまずありました。

「日本語を母語としない児童生徒を教室に受け入れた時に何が問題になるかは、国語研のこれまでのデータから言えるだろう。」「たとえば読解力のつまずきの問題を明らかにするために、いろいろな研究者が議論できるためのデータを国語研が提供することが求められている。信頼できるデータが必要である。」などの意見が出ました。

また、ヨーロッパでは英語を母語としない労働者のために簡便な英語が用いられている事例があるとの紹介がありました。現在、国内では、日本語非母語話者に防災などの情報をわかりやすく伝えることなどを目的とした「やさしい日本語」への取り

「国語研究所の果たすべき役割」の考察は、当初の目的が達成されているかを点検することを通して、実現できるのではないかな。

	1948年設置法	点検
目的	国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究	実施。中核的活動として高度に達成されている。
	国語の合理化の確実な基礎を築く	「国語の合理化」の現代的課題は？
調査研究	現代の言語生活及び言語文化	「言語生活」は実施。「言語文化」の内実は？
	国語の歴史的発達	移管後、本格化。
	国語教育の目的、方法及び結果	「日本語教育」は実施。「国語教育」は断絶。
	新聞における言語、放送における言語等、同時に多人数が対象となる言語	実施。新しいメディアについては未実施のものあり。
事業	国語政策の立案上参考となる資料の作成	独法時代まで実施。移管後は手薄では？
	国語研究資料の集成、保存及びその公表	実施。コーパスとして、独法化・移管を機に充実。
	現代語辞典、方言辞典、歴史的国語辞典その他研究成果の編集及び刊行	報告書、論文としては実施。一般社会に対する還元については要検証。

図3 「1948年設置法」の点検



司会の前川喜久雄教授



パネルに加わる田窪所長

組みがあります。そこで、国語研において、そういった「やさしい日本語」の研究との連携を進めるべきだろうとの話が出ました。

加えて、「日本語を母語としない児童生徒への日本語習得の支援を進めることで、子供たちが親と地域とのブリッジ、棧橋になり、それは俯瞰的に見たときに、地域の活性にもつながっていくことでもある。」といった意見も出て、日本語習得の支援のための研究の重要性が繰り返し議論されました。

意味理解という問題への対応

日本語を母語としない児童生徒は、日常会話はある程度習得できるとしても、自然に日本語が身につくという前提は崩れているのだという指摘もされました。それは、抽象的な概念を獲得しないとならない、小学3～4年生から5～6年生にかけて、その抽象的な概念を獲得するために必要になる言語の習得ができていない

場合、スキルアップが困難になるためだそうです。重要なのは「意味が分かる」ようになることなのだとの説明がありました。

昨今の傾向として、長い文章を読むのが苦手な人が増えているという問題もある、という点も挙げられました。つまり、意味を理解するという問題は日本語教育に関してだけではなく国語教育においても取り組むべき課題であるということが確認されました。そして、国語研としては、教育や言語政策のための基礎となるデータを作る必要があり、必要な調査があればやるべきであるとの意見が出ました。

研究部門・組織の検討

これからの国語研の研究は、どのような部門に分け、どのような名称を付けるのが良いのだろうかという話題もありました。

コーパスを使った日本語史研究の展開はコーパス言語学の中でできるだろうが、言語の歴史の問いは、言語理論の一つとして扱っていくのがよいのではないかと意見が出ました。たとえば、理論言語学と言語の歴史の研究は同じ部門の中で扱う可

能性もあるだろうということです。少し前に国語研にあった「時空間変異」という部門名は、通時と共時の問題を同時に扱う名称としてうまく考えられていたとの意見もありました。

分野の壁が問題にならないような組織づくりが求められるということでした。

大規模アーカイブセンター

最後に、たとえば、方言辞典や音声・文法の記録といったものがすべてアーカイブできるような、大規模なアーカイブセンターが国語研にできることへの期待が議論されました。

「現在も地方の方と協力しながら研究を進めている。」との所長の説明に対し、「重点的な地域だけでなく、そうではない地域にも目をむけてほしい。」という注文がありました。それに対し、再び所長より「お金さえあれば全国展開する気満々。」との回答があり、ぜひその方向でお願いしたい、というところで全体の議論が締めくくられました。



全員でのパネルディスカッション



記念講演

「国立国語研究所のあゆみ —追いかけて、見つめて、その先へ—」

杉戸清樹

SUGITO Seiju

すぎとせいじゅ ● 国立国語研究所元所長

※この講演は国立国語研究所創立70周年・人間文化研究機構移管10周年記念式典(2019年10月1日)において行われたものです。



70年、10年という周年記念、おめでとうございます。私は70年のうち10年前までの35年ほど研究職として在籍した者です。そのような者として、あえて短くまとめれば、題目の副題に記したようなことを、研究所はこの間^{かん}続けてきたと考えています。

この副題で申し上げたいのは、研究所が、この70年間一貫して、日本語を追いかけて、日本語を見つめ、そこから日本語のその先に向けて仕事をしてきた、ということです。

研究所の研究活動は、日本語の生きた姿を追いかけて、その中身や仕組みを見つめ分析して、そこから日本語のこの先、あるいは日本語研究のこの先に向けた成果を作って発信する、ということであった、これからもそうなのだろう、そのように私は考えています。

この副題については、いろいろな観点からとらえることができていると思っています。

1つは、研究所の^{たてまえ}建前に注目する観点です。研究所は70年前に創設されて以来、細かくたどれば4回、その組織の在り方や位置付けを変えて続いてきています。そして研究所の存在を規定する根拠法令もそのつど変わり、その法令の中の研究所の「設置目的」を示す文言も少しずつ変わってきています。

詳しくたどる余裕はありませんが、それらの設置目的は、単に日本語の研究をすることだけを掲げてはいませ

ん。端的に言えば、研究をして、あわせて、あるいはそれに基づいて、それにつながる先のことを行うという構造の内容になっているのを忘れることができません。

70年前、研究所は国立国語研究所設置法という独立の法律によって創設されました。その第1条が設置目的です。「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、あわせて国語の合理化の確実な基礎を築くために国立国語研究所を設置する」という文言で示されていました。「科学的調査研究」という仕事と「国語の合理化の基礎作り」という仕事が「あわせて」という接続表現でつないで示されています。その後、前半の部分で「研究」の対象として「外国人に対する日本語教育の研究」や「資料の作成・公表」が増え、後半の部分で「国語の改善及び日本語教育の振興を図る」が目的とされた時期がありました（独立行政法人国立国語研究所法第3条）。10年前に大学共同利用機関となった現在の研究所は「(同上) 科学的な調査研究並びに資料の作成及び公表」(国立大学法人法施行規則別表第1)を行うことが目的とされています。私なりに留意することは、大学共同利用機関が「大学における学術研究の発展等に資するため設置される」(国立大学法人法第2条)ということと結び付けると、研究所は「大学における学術研究の発展等に資する」という任務を「その先」のこととして担っていると理解できることです(条文引用は簡略化しました)。このようにたどると、どの時代の設置目的も、「研究」と「その先」を含み込んだ構造が見えると思います。

今日の副題に掲げた「追いかけて、見つめて」という部分は、研究所の設置目的の構造のうち「研究」にあたる仕事を少し細かく2つの局面に分けて言っています。「その先へ」は、研究とあわせて、あるいは研究をすることを基盤にして、さらに実現すべき目標・課題のことを言っています。このような3つの局面という構造は、この70年間、一貫して続いていると思います。

具体的な研究事例を取り上げて、この3つの局面を私なりに整理してみます。

❶例えば、語彙の計量的な調査研究です。研究所が長く手がけてきたものです。

追いかける：

- 雑誌90種、新聞、教科書、テレビ放送などの用字用語の実態把握（例えば語彙）出現する語の形・種類・場所・頻度などの把握

見つめる：

- 語・語種・品詞等の記述分析 語彙の構造分析 意味の分布構造

その先へ：

- （見つめる過程から）語の単位論（短単位・長単位）、語彙論の指標や概念（カバー率、類似度、臨時一語など）の創案・普及

⇒日本語研究の理論・方法論への貢献

- （データを活用・再編する研究から）『分類語彙表』（初版1964）という初の日本語シソーラスの案出・編修・刊行

⇒文構造の分析、機械翻訳、文章生成などの基盤情報の貢献

❷例えば、地域社会の言語生活に関する社会調査型の研究では、

追いかける：

- 定点・経年（＝同じ場所で、年をへだててくり返す）の臨地調査
- ・鶴岡の共通語化（20年間隔4回）、岡崎の敬語（20～30年間隔3回）
- ・松江の言語生活と待遇表現研究（24時間録音調査）

見つめる：

- 同一人物の言語使用の変化・不変化 地域社会の共通語化・方言持続

- 話題による敬語の使い分け、言語行動の種類による敬語の使い分け

その先へ：

- 敬語使用の質的变化の指摘・留意喚起
- ・話題の人物への敬語（尊敬語・謙譲語）から話し相手への敬語（丁寧語）への傾斜
- ・年齢・立場など固定的な上下関係に加えて、その場ごとの役割や恩恵の授受関係を意識した敬語使用へ
- 狭義の敬語を含めた多様な待遇表現や言語行動への留意喚起

⇒さらに、国語審議会・文化審議会の答申・報告への反映（「現代社会における敬意表現」（2000年）、「敬語の指針」（2007年））

❸もう1つ、分りにくい外来語、一般人には難しい医療の言葉については、

追いかける：

- 白書・広報紙など公用文での外来語、医療関連の用語の実態
- それらについての一般市民や患者・家族、医療関係者の意識や意見

見つめる：

- 外来語・医療用語の認知率・理解率・使用率、漢語・和語との使い分け



敬語調査のようす（1953年、愛知県岡崎市、調査者は柴田武氏）



談話調査のようす（1963年、島根県松江市）

- 使い分けの要件や理由、「分かりにくさ」の理由や類型

その先へ：

- 『分かりやすく伝える 外来語 言い換え手引き』（2006）の提案・刊行
- 『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—』（2009）の提案・刊行

以上は、3つの例示だけです。研究所は、これ以外にも数多くの調査研究を行い、それぞれに日本語を追いかけて、見つめ、その先の日本語や日本語研究に向けた課題を具体化したということを、こうした例を通して振り返りたいと思います。

少し性格の異なる仕事ですが、研究所が創立直後から続けている日本語研究情報の収集と整理編集という事業があります。専門書、研究論文、新聞・雑誌の日本語関係記事などの具体的な情報を集め（追いかけて）、詳細に分類・整理し（見つめて）、その成果を、かつては『国語年鑑』という刊行物として、現在は電子情報の『日本語研究・日本語教育文献データベース』として日本語の研究・教育に携わる先へ公開・提供し、将来に（この先へ）向けて蓄積するというものです。この仕事も、3つの局面で構成された研究所ならではのものとして挙げておかなくてはなりません。

この3つの局面というのは、おそらく人文・社会・自然の領域を通じて、実証的な研究活動にとって避けて通れない、不可欠な局面ないし過程だと思います。

とりわけ、最初の局面の「追いかける」については、日本語研究で事例を研究対象とする限りは、すでに話されたり書かれたりした言葉をあとから追いかけて捉えるばかりではありません。（かつて、研究所の第3代所長の林 大先生は、このことを言葉の残滓^{ざんし}を拾い集める営みであると、非常に積極的な意味合いを込めて、当時の研究所員に向かっておっしゃっていました。）さらに、対象が現代語であるからには、できるかぎり活きのいい事例をとらえるために、現実の言語生活・言語社会で、いまさっき用いられたばかりの折角の貴重な言葉を、せめて半歩うしろくらいまでせまって追いかけて続けることが不可欠です。

これは、言うほど簡単ではないと思います。質の良い言語データを大量に獲得するために、研究所は、長いあいだ、人手も、時間も、研究費も、まことに膨大な資源を使ってきました。

たとえば、方言研究の領域の基本資料であり続けてい

る『日本言語地図』『方言文法全国地図』『新日本言語地図』、あるいは近年のコーパス言語学を先導し続ける『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』『日本語歴史コーパス』などは、「追いかける」営みそのものの成果にあたります。その努力は、いまま継続中です。

「見つめる」という2つめの局面は、狭い意味の研究の中核部分です。ここで付け加えるべきことは私にはありません。3つめの「その先へ」という局面は、研究所が公的な機関で公的な資源を用いて進めているという意味でも、研究所の研究事業が担うべき任務であり続けているのだと思います。さらに、それより前に、日本語あるいは言語という社会的にかけがえのない資源を研究対象としているということだけから言っても、「その先へ」という課題は重く意識していかねばならないと思います。

そのようなことを含みながら、この先の研究所での研究活動も、日本語を追いかけて、日本語を見つめて、この先の日本語や日本語研究に向けて成果を発信するという枠組みの中で進められるのだらうと、私なりに考えます。

今後も、そうした研究活動が引き続き活発に展開されるよう念じております。ありがとうございました。

この講演は、記念シンポジウムに続いて行われた記念式典において行われたものです。記念式典は、以下のプログラムで行われました。

【式辞】

田窪 行則（国立国語研究所長）

平川 南（人間文化研究機構長）

【祝辞】

村田 善則（文部科学省研究振興局長）

蓼沼 宏一（一橋大学長）

上野 善道（東京大学名誉教授／国立国語研究所運営会議委員）

金水 敏（大阪大学文学研究科教授／日本語学会長）

佐藤 浩二（立川商工会議所会頭）

【記念講演】

杉戸 清樹（国立国語研究所元所長（第7代））

「国立国語研究所のあゆみ—追いかけて、見つめて、その先へ—」

付記

副題のような枠組みで行ってきた研究所の研究活動が、どんな特徴をもっていたのか、日本語研究の分野で何を拓いてきたのかを、付け加えて挙げておきます。

①共同研究を基本として、研究者が育ち、交流しあう場を保ち続けた。

かつて人文研究領域では多くなかった共同研究体制を、当初から研究所の内・外で推進した。次項以下の新しい研究領域を担う研究者が、研究所員としてあるいは共同研究に参画する大学等の研究者として、育ち・活躍し・交流する場となっている。最近の10年は、大学共同利用機関法人の機関として、その体制を国際的な枠組みでも強化充実している。さまざまなテーマの研究會、新たなデータや研究手法の講習會なども頻繁に開いている。

②従来なかった新しい日本語研究を拓いた。

- ・そもそも、現代日本語の、話し言葉についての、調査研究を本格的に始めた。方言研究を除けば、文献に基づく書き言葉の歴史的な研究が、かつてほぼ専らだった。
- ・言語（音・語・文の形・機能そのもの）だけでなく、それを用いる言語使用・言語行動からなる「言語生活」を研究対象として拓いた。

③日本語研究・言語研究に新しい方法論や具体的手段を導入した。

- ・人文系の国立研究機関として初めての大型電子計算機を導入。
- ・ランダムサンプリングを基盤とする統計分析を語彙調査・社会調査等に導入。
- ・定点・経年・同一人物追跡の枠組みの社会言語学的臨地調査の創始。

④日本語非母語話者への日本語教育が本格化する過程で、基盤となる研究・事業を担った。

- ・日本語教員の養成・研修、映像・音声を備えた日本語教材の先導的な開発・供用、日本語教員用指導参考書、日本語学習辞典の編集・刊行。
- ・日本語教育のために必要となる外国語と日本語の対照言語学的調査研究、日本語教育に必要な日本語の語彙・文法・文章・談話などの研究。

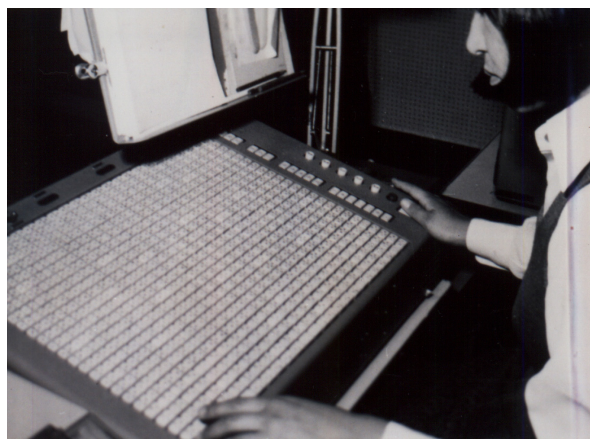
本記事は講演時に配付された原稿をもとに作成したものです。
写真は研究所所蔵の資料写真から編集委員会が選んで添付しました。



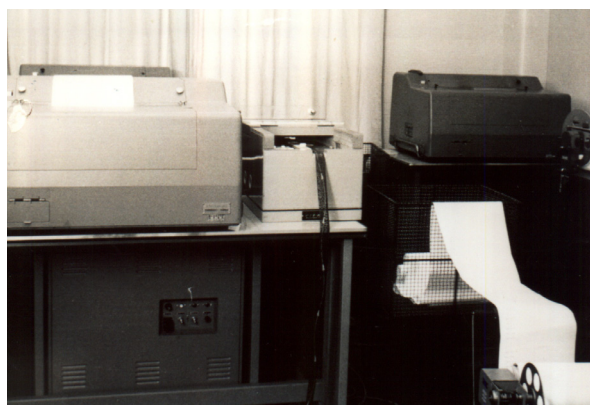
言語生活調査のようす(1949年、福島県白河市)



共通語化調査の報告書
(1950年・1971年・1991年・2011年に実施、山形県鶴岡市)



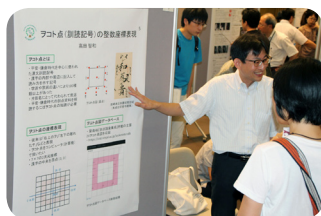
1966年当時の漢字入力の様子(漢字テレタイプ入力キーボード)



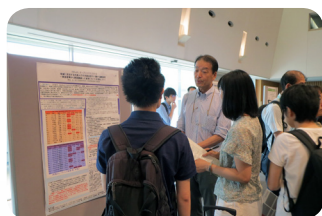
1966年当時の漢字プリンタ(漢字テレタイプ付属印刷装置)

国立国語研究所オープンハウス2019

2018年度から、周年記念行事の一環として、始めたオープンハウス。その2回目となるオープンハウスを2019年7月20日に開催しました。今回は、「ニホンゴ探検2019」と同時開催です。国語研の全教員によるポスターを講堂内に掲示。縦に4列、背中合わせに、35枚のポスターがちょうどほどよい間隔で並びました。多数の大学生・大学院生や一般の方の来場があり、国語研の研究者が来場者と対話をしながらそれぞれに自分の研究を紹介しました。



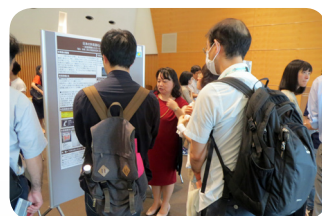
高田智和「ラコト点（訓読記号）の整数座標表現」



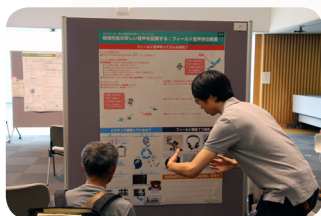
野山広「地域に定住する外国人の日本語会話力に関する縦断研究一言語習得から言語摩滅への変容（ライブ）を受容しつつ」



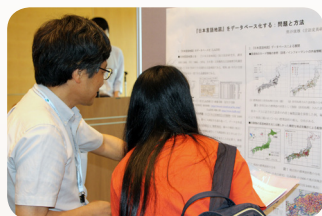
前川喜久雄「発音を可視化する：リアルタイムMRI 調音運動データベース」



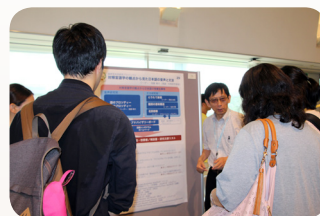
福永由佳「日本の多言語化と言語景観一言語景観のメッセージを読み解く」



青井隼人「琉球列島の珍しい音声を記録する：フィールド音声学の実践」



熊谷康雄「『日本言語地図』をデータベース化する：問題と方法」



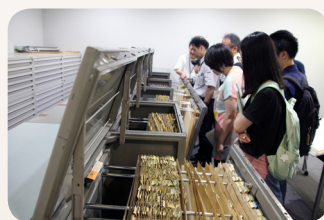
窪園晴夫「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」



小磯花絵「話し言葉の多様性—コーパスから見えてくること—」

今回は「研究資料室中央資料庫見学ツアー」を行いました（先着30名限定）。

箱や引き出しの中には、過去の調査に用いられたカードなど、さまざまな調査資料が整然と保管されています。それらの資料をじかに見ることによって、創立以来70年の間に積み重ねられてきた研究の大きさや重さを体感できる機会になったようです。



オープンハウスの発表ポスターは全てウェブサイトにてご覧になれます。

▶ <https://www2.ninjal.ac.jp/openhouse2019/>



NINJAL フォーラム

どなたでも参加できる公開講演会「NINJAL フォーラム」も、
2018年・2019年は周年記念イベントとして開催されました。

第13回

「日本語の変化を探る」



第13回は、日本語の歴史をテーマとして、NHK放送文化研究所の共催で2018年11月4日に開催されました。

千年を優に超える歴史の中で、たえず変化を続けている日本語——文献に残された古代語から現代の話言葉まで、様々な視点から日本語の変化とその面白さ、難しさについて議論が行われました。

《登壇者》

近藤泰弘（青山学院大学教授）
 小木曾智信（国立国語研究所教授）
 丸山岳彦（専修大学准教授）
 滝島雅子（NHK放送文化研究所主任研究員）
 塩田雄大（NHK放送文化研究所主任研究員）

第14回

「私の日本語の学び方」

第14回は、日本語教育の推進に関する法律の成立などを背景に、外国語としての日本語の学び方をテーマとして2019年11月30日に開催されました。

多様な背景の方をお招きし、日本語を母語としない方がどんな工夫をして、また、どれほど努力して日本語を学んでいるのか、日本語学習の舞台裏に迫りました。

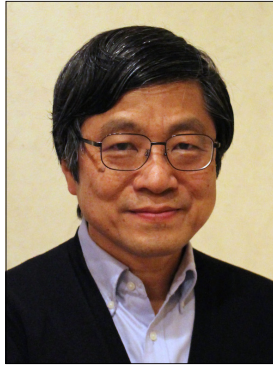
《登壇者》

アルモーマン・アブドゥラ（東海大学教授）
 モハメド・オマル・アブディン（学習院大学特別客員教授）
 平田オリザ（劇作家・演出家・大阪大学特任教授）
 福永由佳（国立国語研究所研究員）
 野山広（国立国語研究所准教授）
 石黒圭（国立国語研究所教授）



NINJAL フォーラムは、YouTube 国語研チャンネルで
 視聴できます。周年記念シンポジウムなどの様子もご覧になれます。
 ▶ <https://www.youtube.com/c/NINJAL-kokugoken>





研究者紹介 014

熊谷 康雄

言語変異研究領域 准教授

「言語と人間」の探究に惹かれて

くまがい やすお●1955年東京生まれ。学校での専攻は高専の電気工学、学部の社会システム、大学院の言語学と少しずつ「人間」に近づいてきました。1988年12月、国立国語研究所に入所。現在は『日本言語地図』データベースの構築に取り組んでいます。

— 研究の道に進んだきっかけは？

やはり大学時代に恩師の柴田武先生に出会ったことだと思います。中学のときは、無線通信の技術者になると思っていて、都立高専の電気工学科に入りました。高専は自由な勉強ができる雰囲気もあり、本当のこととはなんだろうと、基礎的な分野に惹かれていきました。言語の問題が人間に関することの根本に関わると思われ、卒業したら大学に行って言語学を勉強しようと考えました。一浪して埼玉大学教養学部に入りました。言語学の専門はなかったのですが、言語を中心に据えて、社会システム、文化人類学、中国文化を3本柱に、勉強していました。3年のときに、言語学が専門の先生が赴任されると聞き、勉強しなかった音声学の講義に出たのが柴田先生にお会いした最初です。講義の後で、もやもやとしていた疑問を先生に質問したときの気持ちをよく覚えています。世界がどんどん広がっていく楽しい時間でした。先生は研究所の大先輩でもあるのですが、その時は全く知らずにいました。学部4年のとき、柴田先生の言語地理学の講義が始まりました。先生の『言語地理学の方法』がテキストでした。言語地理学では、方言の語形や発音などを記した言語地図を作って、地域で方言がどう変わってきたかを研究します。先生の企画で、埼玉県南部地域を対象とした調査が始まったのですが、現実の世界でことばの調査をして、話し手から資料を得て、方言の分布を地図に描いて分析するという言語地理学の実践は夢のような経験でした。柴田先生の下で言語学の勉強をしようと思い、大学院に進みました。大学院を出てからは、就職して2

年ほど働いていたのですが、退職し、やりかけた研究テーマを続けました。次の当てはないまま退職したのですが、しばらくして、新しい研究部を立ち上げようとしていた国語研に幸運にも採用され、所員になりました。

— これまでどのような研究を？

大学院に進んだときは、構造とあいまいさのようなことを漠然と考えていたのですが、柴田先生の企画のいろいろな調査に関わりました。言語地理学調査の継続、言語接触をテーマとする調査、ある辞書の見出し語全て（約7万語）について自分のアクセントを記す仕事（この頃は、いつでもどこでも、ブツブツ発音しては赤鉛筆で記録してました）やその関連調査など。地理、社会、個人という異なる視点を持つ言語調査でした。修士は留年して3年いました。修論は『言語特徴による地域分割法としての「ネットワーク法」』についての方法的検討』というのですが、最初は先生のお手伝いのつもりが、今も続くテーマになりました。これらの経験は自分の中で息づいているように感じます。研究所に入所した翌年の1989年、新しく発足した情報資料研究部（後に情報資料部門、2009年まで）に配属されました。研究所では、創立以来、所員が研究成果や研究資料を残してきました。また、図書資料や文献情報などの研究情報にも取り組んでいました。その蓄積の上に、将来に向かって、研究と情報、資料の全体像を踏まえ、これを支える、継続性のある仕組み作り、設備や施設、情報技術の導入などの課題がありました。コンピュータやインターネットなどの情報技術の進歩普及の比較的初期からその後の発展の

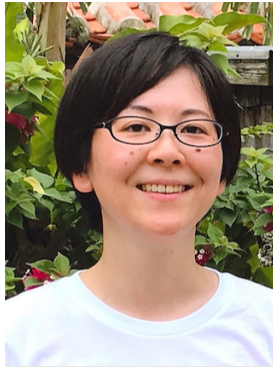
中で課題に向かって仕事をしました。ネットワークを導入したころは、少し歩けば済むような所内でネットワークを引いてどうするの？という疑問も出るような頃でした。今はあたりまえのことがそうなる前でしたので、いろいろなことをやりましたが、長期的な視点を大事にしました。2009年には新しい体制になり、資料や情報は引き継がれています。

— 今、関心を抱いているのは？

長く携わっている『日本言語地図』データベース（LAJDB）を完成することです。研究所が作成した『日本言語地図』全6巻（1966-1974）は、昭和30年代の日本全国の方言の分布の様子が一望できる基礎的な研究資料です。どのような語形や発音がどこにあるか、全国2400箇所を調査しています。ずいぶん前ですが、研究所の先輩の宮島達夫さんに入った50万枚の原資料のカード（話者の回答が記録されている）を持って逃げると、冗談交じりにですが、言われたことがあります。資料の保存と活用を実現する方法として、印刷物の『日本言語地図』の方言分布の情報を計算機で扱える文字データとし、原資料を画像データとして、相互にリンクしたデータベースを構築することを考えました。本格的に着手したのは1999年ですが、続けてきて、近い時期の完成を目指しています。新たな研究の可能性が広がります。

— 今後の研究についてお願いします。

まずは、『日本言語地図』データベースの完成を急ぎたいと思います。その上で、言語と人間の関係に深く根ざしている言語地理学と言語地図をめぐる、原点から考えたいと思います。



研究者紹介 015

中川奈津子

言語変異研究領域 特任助教

今では青森も八重山も関西も、
私のふるさとです。

なかがわ なつこ ●2005年同志社大学文学部卒業。ニューヨーク州立大学修士(言語学)。京都大学博士(人間・環境学)。京都や青森の大学の非常勤講師、日本学術振興会特別研究員(PD)などを経て2019年から現職。

— 研究者になったきっかけは？

学部では日本文学、卒業論文は中島敦「山月記」について書きました。この作品は「人虎伝」という昔の中国の説話がもとになっていて大筋は同じ話なんですけど、中島敦が「山月記」に付け加えた要素に哲学者ニーチェの影響があるのではないかということを主張しました。一応根拠は書いたのですが、「影響があると思う」「ないと思う」で結局是水掛け論になってしまうような気がしていました。「もっと科学的な研究がしたい」と思って大学院では言語学を勉強することにしました。

— これまでどのような研究を？

科学的な研究を目指したかったので、大量のことばの産出例(コーパス)や、実験データをもとにした定量的な研究手法を採用しました。特に、人がリアルタイムで考えながらその場で産出する話しことばのデータは、その人の中でそのとき起こっていることの片鱗(例: 思い出そうとしているときなどの言いよどみ、引き伸ばし)が見えて面白いと思い、話しことばの研究がしたいと考えようになりました。すると、話しことば特有の現象が色々目についてきます。例えば「猫は寝てるよ」と「猫が寝てるよ」の違い、つまり「は」と「が」の違いはたくさんの日本語学者が長年議論しているんですが、話しことばにはさらに「猫 寝てるよ」という「猫」の後に「は」も「が」もつけない言い方もあります。でも話しことばならいつでも何もつけないで良いというわけではなく、「あっ、あそこで猫 ネズミ 追いかけてる!」とは言いづらくて、やっぱりこの場合は「猫が」と言いたい人のほうが多いです

(東京方言では)。どういう場合に「は」も「が」もつけないで良くて、どういう場合に「は」「が」をつけるのかということも、博士論文で調べました。実例に基づいてきちんと検証したかったんですが、まだ道半ばです。指導してくださった東郷雄二先生(現・京都大学名誉教授)にはとても感謝しています。フランス語が専門の先生ですが日本語に関する私の研究も熱心に指導してくださいました。今でもよく「東郷先生はこんなことをおっしゃっていたな」と思い出します。迷ったときの大事な指針です。

— 今、関心を抱いているのは？

話しことばというのは、全部どこかの方言です。私が「日本語話しことば」として博士課程で調べてきたのは、東京方言です。私自身、関西の出身なので東京方言を調べていく過程で「これは私の方言とは違うな」と思うことがたくさんありました。博士課程在学中に田窪行則先生(現・国語研所長)の琉球宮古池間方言の授業をとって、日本語と関連しているのにこんなに違うことばがあるんだと驚きました。しかも、私が博士論文で調べた「は」と「が」相当のものに加えて、「どう」という現代日本語にはないものがあるのです。さらに文中の「どう」の有無によって動詞の形が変わる、いわゆる「係り結び」の現象が場所によってはあるのです。一方、東北の方では「は」も「が」も(「どう」も)あまり使いません。何によってこの違いが生まれているのだろう、どうやったらこれを説明できるだろう、というのが今の関心です。幸いにも巡り会えた多くの方々のおかげで、今は沖縄県の八重山と青森のことばを中心に調査させていただいています。

— 今後の研究についてお願いします。

研究テーマを大きく変えたと思われるかもしれませんが、私はそんなつもりは全くありません。話しことばの現象が面白いから調べたい、どんな違いがあるのか、どのように説明できるのか知りたいのです。でもそのためには、私が博士論文で東京方言について調べたときのような、たくさんの話しことばの実例が必要です。各方言の話しことばコーパスは整備されつつあります。私もまず自分のデータを整備して、コーパスの形で世に出したいです。他の地域のデータもあればあるほど嬉しいので、他にデータを持っていて公開したい人がいれば、手助けがしたいです。

方言の多くは、祖父母世代しか日常的に使われておらず消滅の危機にひんしているの、復興のための活動にも参加しています。幸運なことにも山田真寛くん(国語研准教授)に誘われて、竹富島に伝わってきた民話の絵本を作るのを手伝わせていただきました。八重山にルーツを持つ人たちと研究者が集まって八重山のことば(やいまむに)を話す会にも参加させていただいています。自分の研究対象の言語の母語話者がいないのは困るというのももちろんありますが、やっぱり小さい頃から聞き慣れているふるさとのことばが聞こえなくなると寂しいですよ。今では青森も八重山も関西も、私のふるさとです。駅や空港に着いて方言が聞こえてくると「帰ってきたな」と思います。テレビやラジオから聞こえると懐かしい気持ちになります。こういう気持ちを持ち続けられるお手伝いができれば良いなと思います。

国立国語研究所が70年の歴史において刊行してきた資料・報告のうち、代表的なもの（の一部）を紹介します。

分類語彙表

（国立国語研究所資料集 6）

秀英出版 1964年



国 立国語研究所の刊行物の中で文句なしのベストセラー。ただし『分類語彙表』という無味乾燥な書名には理由がある。国語研は、創立から半世紀以上、書きことばの基本語彙選定を目的として語彙調査を繰り返した。そこでは、まず、使用率順（頻度順）語彙表が作成され、高頻度・広範囲に使用されるといふ量的な側面から基本語彙が選定されたが、同時に、それらが語彙の意味的な体系の中にどのように分布しているかを示す語彙表も作られた。それが「分類語彙表」である。

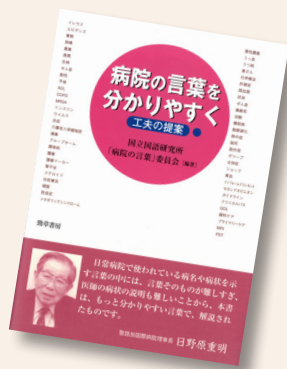
1964年に刊行された初版『分類語彙表』は、そうした「分類語彙表」の完成形とも

いえる雑誌九十種調査のそれに阪本一郎氏の『教育基本語彙』を加え、延べ約3万2千語を798の分類項目（意味分野）に分類したもので、もはや単一の語彙調査の語彙表ではなく、現代日本語の本格的なシソーラスと言えるものであった。その後、2004年には延べ約9万6千語を895項目に分類した増補改訂版が刊行され、現在ではそのデータベース版も利用できるようになっている。意味から単語を引く表現辞典としても、語彙研究をはじめとする様々な言語研究のデータや基準枠・参照枠としても、その利用価値の高さは実証済みである。

▶石井正彦（大阪大学）

病院の言葉を分かりやすく —工夫の提案—

国立国語研究所「病院の言葉」委員会 編著
勁草書房 2009年



病 院では、医療の専門家である医師・看護師などの「医療者」と非専門家である「患者」のコミュニケーションが何よりも大切である。しかし、現実には両者の間に分厚い「言葉の壁」があって、意思疎通がままならない。言葉の壁の正体を明らかにして、医療現場の改善に役立てることはできないものか。そんな思いを共有する医療者と言語研究者が、多様な調査に基づき議論を重ねて作り上げたのが本書である。

医療者が患者に分かりやすく伝えるための具体的な方策を、難解な57語を3つの類型に分けて解説した点に大きな特長がある。本編は医療の素人である患者や家族の立

場・気持ちに配慮した伝え方の解説で一貫しているが、読み物としてのコラムや挿絵も沢山あって、一般の人が難解な医療用語に近づくための解説本としても十分に活用できる。

21世紀の初め、独立行政法人となった国立国語研究所が、「外来語」言い換え提案」に続いて実社会の言語問題に積極的に取り組んだ成果の一つである。刊行から10年余を経過した現在でも、医療の現場や教育方面での需要が絶えないと聞く。医療の進歩が著しいなか、本書に示された工夫の枠組みを検証する新たな調査研究が期待される。

▶相澤正夫（国立国語研究所名誉教授）

「ことばビデオ」シリーズ 〈豊かな言語生活をめざして〉1～5

国立国語研究所
2002年～2006年



国 立国語研究所は2001年度から5年間、日本語や言語生活に関する調査研究の成果を生かした「ことばビデオ」を作成した。「すみません」、「ほめる」、丁寧なことば、方言、あいまいな表現、日本語の音声等をテーマに、身近なことばの不思議さや、ことばによって引き起こされる摩擦を入口にしてことばについて考え、話し合うきっかけを提供することが目的である。

国語科やコミュニケーションの授業はもちろん、日本語教育においても活用できる。たとえば、「日本語はあいまい」と教えられがちであり、本ビデオでもあいまいな断り方に起因する摩擦が紹介される。しかし

その後に、実は、重要な用件を断る際には「できません」のようなはっきりした表現を使う人が大半であるという調査結果が示される。日本語に対する思い込みに気づかせてくれる好例である。調査結果は古くなったとしても、この例に見るようなことばに対する視点や持つべき態度は容易には古びないだろう。

本ビデオは、現在、DVD版で販売されているほか、YouTubeで解説書も含めて公開されている。各巻は複数エピソードから成り、一部だけ授業に取り入れることも可能である。

▶金田智子（学習院大学）

Book Review

著書紹介

明解方言学辞典

木部暢子 編

三省堂
2019年4月



ハンディで内容がコンパクトにまとまっていて、「フィールドワークに持って行く」(はしがき)だけでなく、論文を読む際にために参照したり、読み物として最新の成果を手軽に把握したり、と、いろいろな利用ができそうな辞書である。

項目は、記述重視の立場から、文法と、次いで音声・音韻に関するものが多いが、地理的、社会的、計量的研究の基本事項や、調査法、方言文献などにも目配りがされている。「スイッチリファレンス」「ミラティビティ」のように、従来の方言学にはなじみのなかった用語は、理解の助けになるし、「動詞」「否定表現」「漢語」といったなじ

みの項目では、日本語諸方言で問題となる観点や、具体例とともに簡潔に示されている。「共通語」を立項せず、「標準語」の項の中で触れるに止めるなど、本書独自の立場もうかがわれる。

日本の方言研究は、1950年代には記述的研究が盛んで、その後、地理的研究、社会的研究、計量的研究と、主要な研究法が変遷してきたとされる。2010年代には再び琉球方言を中心に記述研究が盛んになっている。本書は、そのような螺旋状に進展する方言学の前線を照らす辞書であると言える。

▶三井はるみ (國學院大學)

学習者コーパスと日本語教育研究

野田尚史・迫田久美子 編

くろしお出版
2019年5月



本書は「第8回日本語実用言語学国際会議」(2014)のパネル発表を中心とする論文集で、日本語学習者コーパスを利用した習得研究の最前線が示されている。

第1部では新しいコーパスとして、日本語発話を書き取らせたディクテーションコーパス、日本語文を読んで理解した内容を母語で語らせた読解コーパス、日本統治下のパラオで日本語を学んだ話者の発話を集めたコーパスが紹介される。

第2~4部では各種の既存コーパスの分析をふまえ、(1)口頭能力試験(OPI)の超級発話は「こう」や「っていう」等の語彙使用に特徴付けられる、(2)使用語彙による習熟度推定は話し言葉より書き言葉のほうが

難しい、(3)「てみる」等の機能表現の使い方に関して母語話者との差は後接部に見られる、(4)原因理由を主題にする場合に主述の捻じれが起こりやすい、(5)作文では発話より複雑な文法が使われるが発話時の誤用がすべて消えるわけではない、(6)可能形について幼児は単純形→複雑形の順で、成人第二言語学習者は逆順で習得するといった興味深い知見が報告されている。

各章とも記述は平易で初学者にも読みやすい。日本語の習得研究や学習者コーパス研究に関心を持つすべての読者に推薦できる良書である。

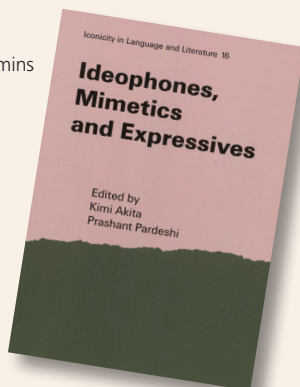
▶石川慎一郎 (神戸大学)

Ideophones, Mimetics and Expressives

(Iconicity in Language and Literature 16)

Kimi Akita and Prashant Pardeshi (Eds.)

John Benjamins
2019年5月



音そのものに意味はあるのだろうか？この問いは古代から学者たちを魅了してきた。基本的に、現代言語学はこの問いに否定的だった。[aoi]という音も[blu]という音ももっとも「青くない」。しかし、日本語には擬態語・擬声語が多く存在する。「ピヨピヨ」鳴くひよこの声は、やっぱり「ピヨピヨ」聞こえる気がする。日本語における擬態語・擬声語の分析は昔から盛んだったが、近年の研究でアフリカや南米の言語でも似たような語が多く使われることが分かってきた。

この学問的發展を背景に、本書は様々な著者による擬態語・擬声語の分析を報告している。分析の視点は、歴史・音・意味・

語形成・文形成・言語習得など様々。対象となっている言語も、日本語はもちろん、韓国語・バスク語・チェコ語・キチュワ語(南米)、その他多数。よって、読み応えは十分。他言語の擬態語・擬声語の例を見ただけで楽しくなってくる。現在、問いとすべきは、「音に意味があるかないか」ではなく、「どんなときに音そのものの意味が表出するのか」であろう。

新進気鋭の若手と大御所が編集した本書は、この国際的な研究をこれからも日本が牽引していくであろうことを予感させる重要な一冊だ。

▶川原繁人 (慶應義塾大学)

編集後記

表紙の写真は、国立国語研究所の四季の風景です。春のまぶしい新緑、夏の青い空と白い雲、秋の鮮やかな紅葉、冬の純白な雪——研究所では四季折々の美しい風景を感じることが

ができます。

さて、今号の特集は、国立国語研究所周年記念行事です。研究所は2018年12月に創立70周年、2019年10月には大学共同利用機関法人人間文化研究機構移管10周年を迎えました。創立70周年・移管10周年を記念し、2018年から2019年にかけて、数々の行事が開催されました。今号では、そのなかから、2019年10月1日に開催された周年記念シンポジウム「国立国語研究所の果たすべき役割」および記念講演「国立国語研究所のあゆみ—追いかけて、見つめて、その先へ—」（杉戸清樹 元国立国語研究所長）を掲載しました。そして、オープンハウス2019およびNINJALフォーラム（第13回「日本語の変化を探る」第14回「私の日本語の学び方」）の様子もご報告しました。

また、14ページの刊行物紹介では、前号に引き続き、研究所がこれまでの歴史のなかで刊行してきた資料や報告等のうち代表的なものとして、『分類語彙表』、『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—』、『ことばビデオ』シリーズをご紹介します。これらの刊行物・ビデオは現在も入手・利用可能（ビデオはYouTubeで公開）です。

今号を通じて、国立国語研究所のこれまでとこれからをご理解いただければ幸いです。

（福永由佳）

※次号（vol.8）は2020年9月頃発行予定です。

国語研 ことばの波止場 vol.7

2020年3月30日発行

編集 国立国語研究所研究情報誌編集委員会
〔 柏野和佳子（委員長） 井上文子 小木曾智信 〕
〔 福永由佳 横山詔一 松本曜 〕
発行 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
電話0570-08-8595（ナビダイヤル）
協力 くろしお出版
デザイン 黒岩二三 [Fomalhaut]